



TITLE:

温泉雑記

AUTHOR(S):

濱田, 青陵

CITATION:

濱田, 青陵. 温泉雑記. 地球 1924, 2(1): 212-216

ISSUE DATE:

1924-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182698>

RIGHT:

溫泉雜記

濱田青陵

一、希臘テルモビレーの溫泉

「旅人よ、ラコニヤ人に告げよ。我等は其の命に従ひて此處に眠れり」とこれはスパルタ國王レオニダスが紀元前四八〇年寡兵を以つてマケドニヤの強敵と戦ひテルモビレーの險に其の屍を埋めた戰場に立てられた記念の碑銘であつたことは、苟も希臘史を學んだものは記憶するであらう。併し此のテルモビレーが溫泉の湧出地であることは往々にして注意せられないかも知れない。「テルモ」は「熱い」と云ふ義であり、「ビレー」は門の意であれば、テルモビレーは即ち「熱門」とも譯す可きで、オエタの山がマリオコス灣に逼つてロクリスからテスサリヤに入る道が丁度此のテルモビレーの險阻を過ぎるであるレオニダスの時より二千五百年の星霜を経て、

桑田碧海の變と云ふ程では無いが、地形の變化は此のテルモビレーも埋られ、險崖は海岸線から稍々遠く距つて緩傾斜になつて仕舞つた。併し名に負ふ溫泉は今も華氏百〇四度の溫度を保つて硫黃泉として存在して居る。其の水の色は青綠色の海水の如く、「キトロイ」と稱する陶槽を用ゐて此地の住民が之を利用して居つたことは紀元一世紀の「希臘のベデカー」であつたパウサニアスが夙に記して居る處である。私は二ヶ月の希臘旅行中此のテルモビレーを訪ね得なかつたことは、最も残念に思つた處の一であつて、ケロニヤから南下する時にテスサリヤの山を望んで幾度か嘆息した所であつた。

二、伊太利の古い溫泉

火山國である伊太利に溫泉が豊富であること

は今更云ふ迄もないことであり、羅馬人の以前早くエトルスキもエトルリヤ各地に湧き出でる溫泉を利用したことは想像に足る。例へばヴィテルボの附近にある古へのアクワ、パスセリスの址の如きは其の一であるが、エトルスキ時代の浴場の設備の著しいものは残つて居ない。浴場は希臘に於いても格段なものは少く、羅馬に至つて遂に宏大な「テルメ」なるものが發現したが、此等は多く自然の溫泉場ではなくて、大都會に於いて人工を以て冷水乃至高温の浴を取る爲めに作られたものである。併し隨處に湧出する天然の溫泉は羅馬人によつて利用せられ、そこに別荘の如きものが出來氣持のよい小浴場が設けられたことは云ふに及ばぬことである。

羅馬附近にはチヅオリへ行く道にバーニと稱する小驛があり、今も臭い硫黄泉が出てゐること、車中からも旅客が見る處である。こゝは古へはアクワアルブルーエと稱せられた處である。ナポリ附近フラグレイアの野は火山地帯であつて此處に幾多の火山と溫泉が連續して居る

ことは、地質學者も考古學者も將た觀光の風流人も先刻知り援いてゐる處であるが、これは思ふに海水浴と共に溫泉によつて羅馬以來繁昌したもので、ポツオリからバイヤに至る沿道海岸には當代の別墅の遺址が累々として列つてゐる、就中「ネロ帝の浴場」と名けられるものは、海に突出した丘陵に穿たれた洞窟で、中には非常の高温の水の出る處がある。私は其の中に案内せられて息のつまる様な苦しみを覺え、少女がバケツに汲み出す熱湯に驚いたことである。

別府などなれば「何々地獄」でも命名せらる可きものであらう。ポツオリの「セラベウム」には羅馬時代のコリント式の柱が立つて居り其れに附著した貝殻によつて嘗て十餘尺も深く海水中に没され、中世此の邊が二十尺程も土地が低下し、其後十六世紀頃から隆起し、今日では再び沈下しつゝある面白い標木を見られることは、ライエル氏の唱道して以來有名なものである。

三、英國バースの羅馬の溫泉場

天然の溫泉に設けた羅馬の浴場としては英國

のバースが最も有名なものであらう。停車場附近の安宿に泊り、忙しく駆け廻つた私は、洋服を脱いで風呂に入ることの面倒さに煩はされてたゞ其の道跡を見物した丈で遂に一浴をも試みなかつた。浴後浴衣がけで情風を呼ぶことが出来ない温泉場は到底我々の興味を惹かない。

バースの温泉は硫化カルシウム及びソヂウム

のを見ながら、一杯の茶をそつたのは私のバースに於ける唯一の贅澤であつた。故原博士は此のバースに滞在中のセイス老先生を訪ねられたと云ふことであるが、心ゆく友と長閑な日を悠々と此處に暮して、羅馬の遺物を訪ひ、靈泉に浴したならば、之に越したる好い土地は英國でも少からう。

四、朝鮮龍岡の温泉里

を主とする鑛泉で、溫度は華氏百二十度の高きに達するものがある。傳説によればブラダッド王が癩病になつて此の温泉を發見して浴したのが紀元前八百六十三年であると云はれるが、羅馬以前に英人が此處に町を設けたことは未だ確證が無い。羅馬征服後に至つて此地に小さい市街が發達し「アクワ、スーリス」の名を以て呼ば

話は飛んで朝鮮の温泉となる。南鮮には東萊の温泉があり北鮮には近頃繁昌しつゝある沙里院附近の温泉があるさうだが、私の知つて居るのはたゞ平南龍岡温泉里温泉丈である。併し此の温泉はど物淋しい田舎びた而して氣持のよい處は他にあるまいと思ふ。

れ、大きな浴場が造られ、神祠が立てられたことは近年考古學的發掘の結果多くの遺物を發見して明かになつた。小さい博物館とボムブ室には此等の發掘品が並べてあるが、浴場址は長方形で、之に附屬した小さい浴場が見られる。浴場の二階で數々の羅馬皇帝の胸像の並んでゐる

數年前又た再び來ることは無からうと別を惜んだ此の温泉に、私は今年の四月ゆくりなくも再び訪ぬる機會を得たのは嬉しいことであつた。眞池洞から龍岡を経て粘蟬縣の古碑を横りながら温泉里に着いたのは暮色蒼然たる頃であつた。浴客の姿も見えない廣々とした浴場に下婢

も居ず主婦に背中を流してもらへば、客足の少ない此の地に遙々と來て業を營む人の身の上に同情の涙を催すのみである。一浴してツト家を出づれば、折しも満月に近い月は團々として東の山の上にあがつてゐる。蒼茫として海につゞく平野は西に廣がつてラムプの薄明りに光る窓が一つ二つ、白い衣服の鮮人が二つ三つ其のあたりを徘徊する荒涼寂寥たる此の景色が所謂溫泉場と思へようか。

私は以前に粘蟬の碑を訪ねて、晩秋の淋しい日、夕暗に鎮されて行く粘蟬縣址と、黄色に色映ゆる海邊とを丘陵の上から見た。而して此の朝鮮最古の漢碑を残した樂浪の人々が、天張里を之に醫したこともあつたらうと思はざるを得なかつた。而して又た此の丘陵を登つて遙かに故國を望んで涙を濺いだこともあつたらうと想像して、自分等の旅の終に近いた善びと思ひ比べたことであつた。而かも彼等樂浪の民の多くは屍を異郷に瘞めて我等の發掘する古墳の白骨と化したでは無いか。

龍岡の溫泉は私には限りない哀愁をそゝる。

五、滿洲の溫泉

朝鮮の溫泉から私の記憶は滿洲の溫泉に移らざるを得ない。既に十餘年の昔語となつたが如舟博士と滿洲を歩いた時のことである。熊岳城から盧家屯附近にある漢代頃の貝墓を發掘して一夜遅くトロに乗つて高梁畠を過ぎ溫泉へ出掛た。十二時過ぎに案内せられる儘川原の中にあるバラック造りの湯に這入つた時は、如何にも夢の様とも云はうか、狐につまされた様とも云ふ可きか、而かも其の湯槽は肥溜でなく靈驗あらたかなる溫泉である。但し此の邊には顔の白い狐が化けて出るとは其後聞き及んだことである。併し今は此の溫泉の設備もスツカリ變つてしまつたことゝ想像せられる。

湯崗子の溫泉へは先山登りの際に一泊した。これは立派な洋館造りの旅館であつたが、湯の色は熊岳城に比してキタない。こゝから一人の支那人を雇ひ、荷馬車に乗つて、ゴロ石の河原通を一人先山へ登つたのは思出深い旅であつ

た。南畫の山水にも似た山峯には樓閣が點綴せられ、石徑を高く窮むれば、寺觀は巖石の頂に現はれると云ふ奇拔な景色を賞し、山上の客舎に蠟燭を點じてたゞ一人毛布に包まつて眠に就いた時の淋しさ、案内の支那人は遠く去つて寺で宿ると云ふ。若し先山が馬賊の巢窟とはじめから聞いて居つては、此の旅は流石に出来なかつたろう。「明天點鐘爾來」と怪しげな支那語が通じたと思へて、翌朝早く伴の支那人が來た時には蘇生の思をした。溫泉に關係もない旅行談は餘り過ぎると叱られるから之で止める。

六、日本の溫泉

日本の溫泉に私の這入たのは山形縣上の山溫泉が抑も最初で、七歳の時である。隣家のT氏の家族に連れられて行つたと覺えてゐるが、會津屋と云ふ旅館の廣い浴槽で泳ぎ廻つた嬉しさ。私の少年時代の追憶としてT氏の令息との友情と共に忘れ難いものゝ随一である。會津屋の婆さんは遠くの昔に世を去つたのであらうが當時一歳下のN君は今や敏腕の外交官となつて

ゐる。

伊豆の熱海から伊東、修善寺湯ヶ島の溫泉と廻り歩いたのは大學時代の修學旅行であり、箱根鹽原の溫泉は中學の生徒を引卒して行つたのが始めである。城の崎の溫泉は應舉寺を見に行つた時に始めて這入り、薩摩指宿の溫泉は石器時代の遺跡を掘りに行つて經驗した。此の開門嶽麓の溫泉は定めし石器時代の人民も知つて居つたことであらうが、日本中で今日でもなほ石器時代の溫泉と云ふ可き原始的の處である。加賀の山中や豐後の別府は近年漸く足を踏み入れた。

併し私は必しも溫泉宿の生活を好まない。衣服を脱いで度々湯に入る興味は私に持てない。たゞ旅に疲れた時そこに溫泉があれば何よりの事と思ふ丈けである。羅馬人が溫浴をやり出して其の國が亡びたと云ふ。病人ならぬものが溫泉に長滞在することは、身を亡ぼし國を滅ぼすに至るとは私の固く信ずる所である。